


あとがき

今年の現代宗教研究所の活動は予定していた計画が軒並み変更となることが殆どでありました。それでもオンラインによるリモート会議のシステムを構築して中央教化研究会議や教化学研究発表大会、研究例会等、講演や研究発表などをなんとか執り行ってきました。各教区の教化研究会議も中止・延期、あるいは当初より規模を縮小して開催となっています。このような状況の中、何事も停滞気味になってしまうことはやむを得ないことかもしれません。しかし世界中に厄介な疫病が蔓延り、人々の平和な社会生活が危機に瀕する今日であるからこそ、現代宗教研究所としては教学的にも教化学的にも深化した研究調査を続け、新たな問題提議を行っていきたいと考えています。

令和3年は宗祖御降誕800年を迎え、宗門全体が日蓮聖人の御誓願を今一度胸に刻まなければならない重要な年であります。『立正安国論』冒頭の「天変・地妖・飢饉・疫癘遍く天下に満ち広く地上に迸る 牛馬巷に斃れ、骸骨路に満てり」という宗祖の記述を私たちは何度目にし、拝読したことでありましょう。しかしこの言葉に込められた宗祖の悲嘆、疑問、怒りに対して、私たちは真摯に思いを同じくしていたでありましょうか。東日本大震災を経てコロナ禍に心身ともに苦しめられている日本社会の現状を顧みて、私たちはこの記念すべき年にこそ宗祖の願いを深く再考すべきであると感じます。

檀家制度による寺院運営を基盤とした日本の寺院、僧侶の在り方は、時代の変化に即して若干の変化、社会への適用をしてきたとはいえ、基本的に近世以降大きく変化していませんでした。とはいえ変化していないからこそ、寺院中心の日本仏教は様々な日本文化の背景となり、人々の生活と密接につながる縁を持ち続けることができたともいえます。しかし明治維新から150年余、第二次世界大戦終了からも76年過ぎようとしている令和の時代、阪神淡路大震災、東日本大震災等甚深な被害をもたらした自然災害、また令和2年突如として世界を襲った新型コロナウイルスによるパンデミック、疫病災害等々、人間の作り上げた生活・文化をいとも簡単に



破壊してしまう自然の脅威がある一方で少子化、高齢化、都市部以外の過疎化、「家族」解体、人の孤独化、インターネットの普及による生活上の大きな変化など、現代日本特有の現象は宗教界にも大きな変化をもたらしていることはいうまでもありません。

今回のブックレットはいわゆる宗教的パラダイムシフトが起こっている現代日本において未来の宗教界、さらには日蓮宗がどうあるべきか、より善い道を模索するべく、そのヒントとなるように願いを込めて作成いたしました。ご一読いただければ幸いです。